



## 上原美術館【仏教館】企画展 伊豆 民間仏めぐり

会期：2025.4.26-9.23 ※会期中無休・一部作品で展示替えあり

### ごあいさつ

6世紀に日本に伝来した仏教は、都に仏教文化の大輪の花を咲かせ、やがて各地に伝播しました。古代・中世の造像を担ったのは、主に皇族や貴族、地方豪族、武士たちで、この時代、仏教美術の名品が数多く生み出されました。

室町後期から戦国時代になると、仏教が地方の民衆の間にも定着します。やがて江戸時代に入ると、全国津々浦々で民衆が仏像造像を発願し、時には様々な立場や階層の人々が自ら造像するようになりました。こうして生まれた仏像の数は、前代を圧倒します。量で見ると、江戸時代は仏像造像の黄金時代なのです。

江戸時代の伊豆の人々は、江戸に住む仏師たちに造像を依頼したり、彼らが制作した仏像を購入して、寺院やお堂に迎えることが多かったようです。しかしその一方で、各地の寺院の片隅に目を凝らし、地域のお堂を訪ねると、伊豆に生きた作者による仏像も伝えられています。これらの像は職業仏師が造る像と比較すると、素朴な造形の像が多いのですが、不思議な魅力を宿しています。

伊豆半島南端、南伊豆町石廊崎の正眼寺般若堂に伝えられた茶枳尼天像は、いわゆるお稲荷さんの像。狐に乗る茶枳尼天と狐の表情は朗らかで、狐の後ろ足が高く跳ね上がるさまはなんとも愉快です。

本展では、伊豆で生まれた、造形的には拙いかもしれませんが、愛らしく、愉快で親しみやすい魅力的な仏像を、伊豆半島の全域から集めて展示いたします。

## 1. 尊名不明……が民間仏

### 尊名不明像

江戸時代（19世紀） 石造 彫眼 下田市須原・薬師堂  
下田市の山間、須郷川が流れる谷あいを開けた須原地区。本像はこの地の薬師堂に伝えられた石仏です。石仏といえば野に立つのが基本ですが、このお像はお堂の中で長年、線香の煙にいぶされ、真っ黒です。蓮台に乗り、光背を背にした姿から仏像であることは確かですが、地藏菩薩なのか、それともお釈迦さまなのか、決め手がなく分かりません。地域のお堂に伝わる仏像には往々にしてこんなことが良くあります。不思議で、素朴で、愉快で、心温まる民間仏の世界へようこそ。



## 2. もじゃもじゃパーマのような頭上面

### 十一面観音像

江戸時代 木造 彫眼 三島市安久・長福寺  
三島市の長福寺に伝えられた仏像。十一面観音は本面のほかに十の頭上面を持ち、あらゆる方角を見て救済を行うみほとけ。江戸時代の十一面観音は、頭の鉢にずらりと一列に九面を並べ、結び上げた髻の上に残り一つ、仏面を載せる姿が普通ですが、本像は頭上に二段、両耳の横にそれぞれ一面をあらわしています。頭上面がまるでパーマの様にも見える愉快的な仏像です。



## 3. 狐にまたがり、にこやかに疾走する女神像

### 茶枳尼天像

室町後期-江戸時代前期（16世紀末-17世紀） 木造 玉眼 彩色  
南伊豆町石廊崎・正眼寺

伊豆半島の最南端、石廊崎の臨済宗建長寺派の寺院、正眼寺に伝わる女神像で、いわゆるお稲荷さまの像。稲荷神は神道では稲穂を担ぐ老翁ですが、仏教では女神とされ、本像のように白い狐にまたがる姿が一般的です。

本像は本堂向かって左手の高台にある般若堂の本尊で、お堂からは石廊崎漁港を見下ろすことができます。本像は古来、漁師の守り神で、漁港がボラ漁で栄えた頃は、その時最初にとれた最も大きなボラを2匹、この像に奉納する習慣があったそうです。



#### 4. 衝撃的なおすがた！木片のような誕生仏

##### 誕生仏

江戸時代 木造 彫眼 素地 下田市須原・薬師堂  
令和6（2024）年12月1日の調査で下田市須原地区の薬師堂から見出された誕生仏。誕生仏は仏教の開祖、お釈迦さまが誕生した時の姿を写すもので、右手を挙げて天を、左手は地を指して「てんじょうてんげ天上天下唯我独尊」と宣言したさまをあらわします。この像の場合は、両手の上げ下げが逆になっていますが、それ以前に、まるで木片のような造形が衝撃的です。お腹がぷっくり膨らむさまも見どころだと思います。



#### 5. どこかで見かけたようなお顔の達磨さま

##### 達磨像

江戸時代（寛政4[1792]年） 木造 彫眼 彩色 函南町上沢・東光寺  
伊豆北部、箱根への西の玄関口にあたる函南町の東光寺に伝わる達磨像。達磨は中国の嵩山少林寺の岩窟に至り、何も語らず9年間坐禅を行ったとされるインドの僧。中国に言語によらぬ禅の教えを伝えた僧で、日本でも禅宗の祖として尊崇されています。本像は厳しい修行に打ち込む達磨の姿を写すものですが、厳しさより親しみを感じる姿です。背面の墨書から、寛政4(1792)年、露木氏ががんしゆ願主となって造像したものを、安政6(1859)年、その子孫が塗り直したことが分かっています。



#### 伊豆北端のみほとけたち

##### 6. 子安観音像

江戸時代 木造 彫眼 彩色 熱海市伊豆山・逢初地藏堂

##### 7. 韋駄天像

江戸時代 木造 彫眼 現状古色 三島市安久・長福寺

##### 8. 男神像

江戸時代 石造 彫眼 彩色 三島市安久・長福寺

新幹線で伊豆を訪れる旅行者が最初に降り立つのが熱海市か三島市。ここでは熱海と三島の仏像をご紹介します。



No.6 は熱海市伊豆山地区の逢初地藏堂の子安観音像。逢初地藏堂は北条政子が愛娘、大姫おおひめの病氣平癒を祈って建立。子を抱く子安観音は子授けと子供の成長を祈る仏。時代を超え、奇しくも2つの母の愛が地藏堂で出会いました。No.7 とNo.8 は三島市安久地区の長福寺の仏像。仏法を護る守護神の韋駄天は童子のような姿。男神像は伊豆石で造られた神道の神の像。石仏のほとんどは仏像で、石の神像はあまり見ません。



## 9. 仏教受難の日に造られた仏像たち

閻魔王像・奪衣婆像・冥官像

明治時代(明治4[1871]年) 木造 彫眼 彩色 伊豆の国市御門・御門地区  
伊豆の国市御門地区は伊豆最大の沃野である田方平野たがたへいやの南に位置。この4体は、この地に一昨年まであった十王堂に、十王像(現存7体)、地藏像、3体の如来像とともに伝来しました。ペンキによる補修が惜しいものの、太い一材を豪快に用いた一本造りいちぼくづくで、素朴な作風はいかにも民間仏。特筆すべきは閻魔像像底の「仏衰明治四年」の墨書です。明治初期は廃仏毀釈の嵐が吹き荒れた仏像受難の時期でした。この時期に信仰を守り、受け継いだ先人の思いを今に伝える貴重な文化財です。



## 10. 赤牛伝説の寺の旧本尊

十一面観音像

室町後期-江戸時代前期(16世紀末-17世紀) 木造 彫眼 現状素地  
伊東市池・龍溪院

伊東市の池という地名は、かつてこの地に大池があったことにちなみます。この池のほとりに福泉寺という寺がありましたが、この寺に宿る者は必ず姿を消したと言います。この話を聞いた高僧が一夜を過ごす、大池の主である赤牛が現れます。高僧が牛に問うと、仏法を聞きたいと願い、僧が来るたびに訪ねたが、決まって僧は牛を害しようとするためやむなく殺したとのこと。高僧の教化を受けた赤牛は成仏したと言います。本像は福泉寺の旧本尊で、福泉寺が廃絶後、赤牛を教化した高僧が開いた龍溪院りゅうけいいんの観音堂に移されたと伝えられています。



## 11. 仁王と見まごうばかり。肉体派だけど菩薩像

### 日光菩薩像・月光菩薩像

室町時代-江戸時代（16-17世紀） 木造 彫眼 彩色 伊豆市修善寺・修禅寺

伊豆の名刹、修禅寺本堂に安置される薬師如来像の脇侍像。向かって右の像は頭上に金色の日輪、左は月輪があることから、薬師如来の脇侍である日光、月光菩薩であることが分かります。菩薩は優美な姿が普通ですが、この像はどうでしょう。一材から豪快に彫った体軀はたくましく、胸板厚く、腕は太くいかに頑健で強そうです。普通なら両肩から垂れ下がる天衣は上に翻り（上部欠損）、まるで仁王像のようです。前方ににゅっと突き出た太い首も本像の個性。民間仏ならではの独創性に満ちた迫力の造形です。



## 12. どっしりとした重量感。着衣の梵字にもご注目！

### 弘法大師像

江戸時代 石造 彫眼 金泥 南伊豆町中木・薬師堂

南伊豆町中木地区は入り組んだ地形に恵まれた天然の良港で、漁港として、荒天時の風待ち港として栄えた港町でした。薬師堂は港を見下ろす高台に位置し、海に生きる人々を見守る大切な信仰の場でした。本展ではこの薬師堂から本尊の薬師如来像(No.24)、本像を特別にご出展いただきました。

本像は伊豆石の塊から刻みだした僧の像で、右手に密教法具の五鈷杵を握り、左手に数珠をとる姿から弘法大師と分かります。

それにしても頭部に対して、体のたくましさはどうでしょうか。着衣に梵字が書き込まれているのも密教の開祖にふさわしい表現です。



## 13. ふしぎな人物や動物大集合

### 涅槃図 ※～7/12まで

江戸時代（享和3[1803]年） 紙本着色 南伊豆町上小野・安楽寺

仏教の祖、お釈迦さまが入滅する場面を描いた図。中央に横たわるのが、お釈迦さまで、その周囲には入滅を嘆き悲しむ菩薩や神々、僧侶、在家信者、動物たちが集まっています。

図の上方には満月が描かれ、お釈迦さまの母親である摩耶夫人が天界から駆けつけてくる様子が描かれます。本図は江戸時代後期に描かれました。お釈迦さまの周りに描かれた人物は独特な表情で悲しみを表現しています。また画面下



方に描かれる動物や虫など、何かわからない不思議な姿のものも見られます。なお本図は元となる絵があったと考えられ、近年、類例が発見されました。

#### 14. 洞窟の聖域にまつられる女神像

##### 白山権現像・女神像

石造／明治時代（明治 11[1878]年） 木造／江戸時代 西伊豆町<sup>たご</sup>田子・圓成寺  
大きな像は圓成寺背後の岩山にある白山神社と呼ばれる岩窟に安置される女神像。伊豆青石<sup>あおいし</sup>、軟石と称する凝灰岩製で、加工が容易なため石仏の材料として多用されました。手にした鉢の中に、とぐろを巻いた蛇がいますが、この姿は江戸時代の書籍『仏像図彙』に掲載された白山権現図と一致します。白山権現は北陸、白山の女神で、全国的に信仰されました。背面に長方形の空洞がありますが、付属する木札によると、かつてはここに小さな古い女神像を納めていたようです。小さな木像は圓成寺本堂に伝わる女神像で、この像も白山権現の可能性がります。



#### 須原中村薬師堂のみほとけ

##### 15. 十二神将像（丑・寅・酉）

江戸時代 木造 彫眼 彩色 下田市須原・薬師堂

##### 16. 地藏菩薩像

江戸時代 木造 彫眼 素地 下田市須原・薬師堂

##### 17. 如来形像

江戸時代 木造 彫眼 素地 下田市須原・薬師堂

須原地区は下田市北部、山々を須郷川が穿った谷あい  
に開けた地区です。昨年 12 月、地域の皆様のご厚意により当  
地の薬師堂の調査が実現しました。

お堂のご本尊、秘仏の薬師如来像を守るのが、頭上に干支  
を載せた 12 体一組の十二神将像。本展ではこのうち、丑  
神将、寅神将、酉神将を展示します。普通十二神将は強面  
ですが、このお像はどうでしょう。また地藏菩薩像、頭の  
ぼつぼつを螺髪と考え、一応如来像としましたが、実はよ  
くわからないお像にもご登場願いました。いずれ劣らぬ愉快的みほとけたちです。



ある意味、究極のみほとけ

18. 虚空蔵菩薩像

江戸時代 木造 彫眼 現状古色 下田市須原・楞沢寺

19. 地藏菩薩像

江戸時代 木造 彫眼 現状古色 下田市須原・薬師堂

20. 観音菩薩像

江戸時代 木造 彫眼 現状古色 下田市須原・楞沢寺

21. 地藏菩薩像

江戸時代 木造 彫眼 現状古色 下田市須原・楞沢寺

奥伊豆下田の奥座敷、須原地区は須郷川沿いの谷あいの地区。この谷を奥に奥にと進むと、清流の対岸に見えてくるのが楞沢寺です。No.18、20、21のお像は、今年の2月、このお寺の涅槃図(本展後期に展示)を拝見した際に出会い、ご出展いただきました。

No.19 は須原中村薬師堂で出会ったお像。

最初は何だかわからず、胸元の突起に気づき、これが手の表現だと分かって、初めて

仏像なのだと理解できました。どこまでが木片で、どこからがみほとけなのか。そんなことを考えさせられる、でも、魅力的なお像です。



行者の仏像

22. 観音菩薩像

江戸時代 木造 彫眼 現状古色 河津町見高・真乗寺

23. 観音菩薩像

江戸時代 木造 彫眼 現状古色 東伊豆町奈良本・北川地区

24. 薬師如来像

江戸時代 木造 彫眼 漆箔 南伊豆町中木・薬師堂

伊豆大島を目前に臨む海岸線で知られる東伊豆町。その一隅に北川港があり、数年前まで瑞雲院という寺がありました。No.23はこの寺に伝えられた仏像で、海から漂着したと伝えられる霊像です。三角形に高く尖った髻、切れ上がった両目、両眉につながる太い鼻梁は太いまま鼻先にいたり、鼻に接して尖った小さな



口をあらわします。着衣も独特で、両肩に刻む衣文はあまり例を見ません。独創的な造形ですが、No.22、No.24 は面貌や着衣が共通します。同様の像は他にも各所にあり、伊豆各地を移動し、造像した行者の作例と考えられます。

## 25. 建築彫刻の名工が彫った仏像

### 閻魔王像

江戸時代（19世紀） 木造 彫眼 彩色 石田半兵衛 作  
松崎町岩科・指川地区

伊豆西海岸の松崎町。岩科川沿いに水田が広がる指川地区に伝えられる閻魔像。像底の墨書から、この村の僧、源心が願主となり、江奈村の石田半兵衛が制作した像であることがわかります。幕末に活躍した石田半兵衛は、神社建築を飾る堂宮彫刻の名工。多くの傑作を残しましたが、仏像は他に知られていません。仏像としてはあまり見ない独特の構造や造形に、慣れない仏像に挑戦した名工の苦心がうかがえます。



## 26. 伊豆を代表する仏師の初期作品

### 観音菩薩像

江戸時代（文政元[1818]年） 木造 彫眼 素地  
永井太犬丸（松本雲松）作 河津町見高・真乗寺

本展では伊豆の宗教者や庶民が刻んだ民間仏をご紹介しましたが、伊豆の仏像の大多数は、京都や小田原、身延、江戸の仏師が制作したものです。こうした中で江戸後期になると、伊豆にも仏師が現れます。

幕末の下田に住んだ松本雲松は、仏像だけで80体を超える作品が確認されている、伊豆を代表する仏師。本像は雲松23歳の作品、貴重な最初期の作品。当時の彼は永井太犬丸と名乗っていました。



## 上原コレクション名品選

### 阿弥陀如来像

鎌倉時代（文永7[1270]年） 一木割矧造り 玉眼 漆箔  
鎌倉時代に多く作られた、阿弥陀の三尺立像。一尺は約30cmですが、古い時代には複数の尺があり、本像は小さな尺（一尺=26cm）を用いるものです。

生けるがごとく生々しい表情は鎌倉時代の特徴ですが、低い肉髻、大粒の螺髪、頭の鉢が四角く張る表現は、鎌倉中期以降の特徴です。

本像には造像願文が納められており、蓮願なる僧が人々の極楽往生を願って造像したこと、文永七(1270)年七月三日の年月日が記されています。制作年代が判明する像は希少で、圧倒的多数の年代不詳の像の年代を考える上で基準となる貴重な作例です。



### 阿弥陀如来像

鎌倉時代（13世紀） 一木割矧造り 玉眼 漆箔  
阿弥陀如来は信者を極楽浄土に迎え取る仏で、鎌倉時代には本像のような三尺の立像が多く作られました。水晶製の玉眼を用いた理智的な面貌、写実的な着衣の表現は鎌倉仏の特徴です。一方で、通常縦にあらわす下半身正面の衣文をU字型とするのは異例。

また、外からは見えませんが、台座上に2本の棒を立て、両踵後ろに開けた穴に挿して立てる手法も特異です。これは仏の足裏に車輪文様（千輻輪相）を表現するためで、仏像を經典通りにつくる鎌倉期の生身表現の好例です。



### 十一面観世音菩薩像

平安時代（10世紀） 一木造り 彫眼 漆箔 重要美術品  
十一面観音は、十の頭上面を持つ観音の化身。十面は全方角の衆生をもらさぬ救済をあらわすといえます。  
頭上面と天衣は後補ですが、台座蓮肉まで含んで一材で造る一木造り。装身具を別に作って取り付けない点、肉身を軟らかい素材を捻って作ったかのようにあらわすのは古い表現で、10世紀にさかのぼる古像です。平成元(1989)年に当館が収蔵した像で、古い仏像としては、上原美術館最初のコレクション。当館を代表する仏像です。



## 二天像

平安時代後期（12世紀） 一木造り 彫眼 素地  
二天像は、東西南北を守る四天王のなかから二尊を選んで造る仏像で、大寺院の中門や本尊の左右に立ち、仏や寺院、仏教徒を魔や災厄から守る守護神です。構造は、頭と胴体、両足をヒノキと思われる一本の材でつくる一木造りで、両腕と風をうけてひるがえる衣の袖を別に造って寄せています。太くがっしりとした体はたくましく、悪や災いを象徴する邪鬼を力強く踏みつける頼もしい仏像です。量感に満ちた的確な造形から、仏像造像を専門に行う仏師の作とわかります。



## 唯識三十頌 ※~7/12まで

江戸時代（承応元[1652]年） 紺紙金銀泥 尊覚親王 筆  
後陽成天皇(位 1585~1611)の第十皇子、尊覚親王(1608~1661)が書写した仏典。親王は10歳で僧となり、興福寺や清水寺の住職を歴任しました。

漆黒と見まがうばかりの濃紺色に染め上げられた和紙に金字で書写したもので、払いの一面を長く伸ばす書体が個性的です。見返しに描かれた弥勒菩薩も見どころで、56億7千万年後、地上に出現して釈尊の救済にもれた者を導くとされる仏。弥勒菩薩は本書が説く唯識思想の祖とされており、そのためここに描かれたのでしょう。



## 中阿含経（巻五十一） ※~7/12まで

奈良時代（8世紀） 紙本墨書  
今から千三百年ほど前の奈良時代の古写経。奈良時代は仏教の力で国を守る鎮護国家思想に基づき国家事業として経典の書写が行われ、質の高い古写経が制作されました。本経は60巻からなる「中阿含経」の51巻目で18枚の料紙を継いだ長さは965.5cmに達します。小振りでしなやかな文字は中国・初唐の書の影響で、一点一画をおろそかにしない文字は奈良時代の特徴。巻末の奥書から、古く大阪府八尾の神社にあったことがわかりますが、本経以外の他の59巻の所在は不明です。



## 菩薩像

中国・宋時代（12-13世紀） 一木造り 彫眼 彩色

腰をひねり、伸びあがるように立つ中国の菩薩像。右手で盤にのせた供物を高くかかげる姿で、本来は中尊の左右に立つ一对の脇侍像の一体として、中尊に供物を差し出す像であったと考えられます。岩座から頭頂まで一本の木で造り、両腕、持物、天衣を別に造って寄せており、表面には塑土を塗った上、岩絵具で着色しています。

頬がふくらむ丸顔と、小さく唇を結んだ表情は少女のようで、首を傾けるさまも愛らしい仏像です。



## 阿弥陀三尊像

鎌倉時代（13世紀） 寄木造り 玉眼（阿弥陀） 彫眼（脇侍） 漆箔

松崎町吉田区 静岡県指定文化財 ※当館寄託

西伊豆の松崎町、吉田寺の本尊。通常、阿弥陀の脇侍は観音と勢至菩薩ですが、本像は勢至を地藏に代える特異な三尊像です。凛々しい面貌、写実的な造形は鎌倉仏の特徴。衣文を減らし量感を強調する表現などから、作者は運慶に近い慶派仏師と考えられます。

伊豆は鎌倉幕府の執権を歴任した北条氏の出身地で、運慶をはじめ慶派仏師の仏像が多く伝えられています。本像も北条氏が関わった像の可能性が指摘されています。

